

俳句

青木敏行

絶壁の徐福渡来地磯すみれ
夕暮れて母の匂ひの吸蔓
稲の花咲けよ咲けよと牛の声
秋燕の大地を空を惜しみつつ
大阪や焼鳥匂ふアーケード

あや子

早咲きの河津桜や川面染め
うららかや二羽の鳩来て餌ねだり
蛭来^こよ闇の川辺の恋灯り
帰られぬ里の林檎の紅き頃
初雪や化粧美し富士の山

(みちくさ)

飯島千秋

何処までも連なり連なり山笑う
旅の宿長期滞在燕の子
新米のシール貼られて出荷待つ
愛の羽根かの人の胸灯しおり
母の買う三年日記傘寿なり

(冬すみれ)

家田 禮

つばくらめ挨拶がわりの宙がえり
箱根路や空気まるごと宿に入る
木の実降る小さき裏山にぎわいて
赤とんぼ風にはおずりビル谷間
蟬しぐれ廃校の庭立ち尽くす

(はまべ)

池野 隆

(天為湘南)

森を抜け祭囃子の風となり
若夏や風の立ち寄るカフエテラス
島と島結ぶ大橋大夕焼
通り雨曲がり胡瓜の光る棘
夕暮れてひらがなで鳴く秋の蟬

石垣 みち代

(むかこ)

河骨の一花かかげる沼の黙
犬ふぐり禅問答めく二人かな
下降線たどる体力大花野
神無月青き地球は不眠症
万両の紅きに無為の日を重ね

石崎 玄舟

(一葦)

新年の障子そろりと開けにけり
霜柱光放ちて土に還る
天球に星あるごとく池に蝌蚪
病院に我を待つ母吾亦紅
遠花火ピクリと動く犬の耳

一色 千穂子

(波)

如月の水は色とも言へぬ色
乗り来たる蝶と一緒に降りる駅
風鈴の外すに惜しき音色かな
おしろいや昔はどこも子沢山
寒もどる年寄りに又誕生日

伊 藤 成 子

樟脳と木箱へ帰る雛かな

(天為湘南)

護美箱へ小言もをさめ月見草

コスモスの内緒話を風運ぶ

青空を知らず海鼠は海を這ふ

蠟梅のかくれ上手や夕木立

伊 藤 就 晤

菜の花やまだ背に硬きランドセル

(天為湘南)

雲喰ひ腹いつばいの鯉幟

日盛やパンダ添寝の保育園

朝顔は今日の命を咲きにけり

一輪を咲かす枯野の底力

伊 藤 真 理 子

自在なる水の流れや秋深む

(波)

かまつかやひと雨ごとに深む紅

占ひは大器晩成冬に入る

空の青きはだて千の吊し柿

帚木や余生の形に枯れつくす

伊 藤 美 也 子

産院の喜び色のシクラメン

(波)

父の日や何もいらぬと父の言ふ

朴の花空の余白といふところ

炎昼や爆発しさうカレーパン

からからと蕎麦屋の引戸初つばめ

稲垣 正晴

(さら)

水滴も琥珀に透ける麦茶かな
水澄みて水無きやうに魚動く
書に向かふ古稀の夜長は揚げおかし
遠き日の手帳を開く秋思かな
松手入日本の松となりにつけり

犬丸 由紀子

(湘南若葉会)

白書院檜香に立つ今朝の秋
放生の鯉の水澄む一遍忌
一遍像賦算へ一步小鳥来る
菩提子と飛ばしきつたる空の青
寺域より一つづつ飛ぶ草の絮

今井 美恵子

(波)

永き日や柱時計の大き振子
海は夏忘れられたる遭難碑
新松子地図には載らぬけものみち
すさまじや黙示録の世まのあたり
江ノ電に勝手踏切寒に入る

居山 勝

(天為湘南)

坪庭の藁のかをりや冬支度
蒼天に揺れる石榴の口赤し
路地面のチョークの画廊秋の暮
容赦なし稲まる呑みのコンバイン
天界の絵師のちぎり絵翳雲

岩谷明子

うさお

(冬すみれ)

ほろ苦き別れ幾つか露の臺
雨洗う身延の寺の紅しだれ
芍薬や写真の母の笑み絶えず
形見なる藍の浴衣の花菖蒲
桜蘭一輪開花夫手術

岩見好晃

江口文子

(しら)

母の日や遺影に感謝後悔も
校庭に部活の響き麦の秋
通し鴨岸边に遠く二羽がゐる
裏道のおしろい花に曲がりけり
万太郎句集を置くも冬座敷

(はこべ)

新酒酌む今宵五勺の蛇の目猪口
梅雨しとど今宵ひとりの米を研ぐ
青時雨真砂女のごとき恋をして
遠花火稻村ヶ崎の松傾ぐ
冬木道靴音だけが遠ざかる

(天為湘南)

夏帽子脱げば剃りあと青青と
手の傷をかばふ団扇の重さかな
旧校舎よき風のくる投票所
盆仕度祖母の背筋の伸びる時
折鶴を七夕竹に飛ばしけり

大久保 啓子

サングラスかけて弱気を振り払ひ

炎天下祝詞短く地鎮祭

夕東風や富士山見ゆるあたりまで

ラムネ玉仏の母に見せに行く

花菖蒲隣家はお転婆三姉妹

(たけのこ)

大庭 葉子

噴水の高低につれ人の顔

メロンの香目にかよひつつ掬ふパフェ

春の月各階とまるエレベーター

氷上の天地を拓く大回転

鈴虫や土の匂の闇ほどき

(天為湘南)

大庭 浩子

大平 雅芳

満月や李白引込む水の面

まん丸に空閉込めり芋の露

液晶の青に沈めり秋夕べ

まなざしの何か言ひたげマスク越し

足音にふと振返る古日記

(天為湘南)

淋しさの起点枯山背負ふ駅

青年に愛の傷みや草いきれ

濡れ色のいちごは皿に密なる夜

向日葵の絶頂にして翳り立つ

高跳びの助走しづかに鰯雲

大矢 曉 美

(はまべ)

国葬日もつてのほかの菊小鉢
初夏の冷え響く術後の力なき
同級の訃報無念の夏落葉
袴追うちさきぼつくり七五三
月明り銀河の隅の一人黙

大山 賢 太

(道草・翡翠・秋桜・渚)

卯塔の板割浅太郎秋暑し
風やんで菊日和かな猫日和
長々と三和土に置かれ自然薯
鱗模様規則正しく新松子
枯蟪蛄元気に鎌を振り上げる

岡 本 泉

(鷹)

あぢさゐを壺いつばいに忌を修す
推しはかる残りの月日白木槿
青北風や終日人に会はざりき
ソプラノの寒声洩れし二階かな
木の芽和皿に盛りつつヴィヴァルディ

荻 野 樹 美

(神奈川現代俳句協会)

弓手矢手背真直ぐに秋に入る
風鐸の揺らぎ微かや秋澄めり
渾身の知力体力山黄葉
枯れ急ぐものに優しき今朝の風
生き死にのあわいをちらと冬さくら

小田 徹男

(さら)

秋深し老いて未知なる吾に逢ふ
老い方の愚直なるまま去年今年
蓬餅母の作りし香りかな
戦争をまざまざと見せ春遅し
良寛の齢となりて夏旺ん

笠原 与志生

(湘南若葉会)

新蕎麦や伊那谷深き宿泊り
汚れなき笑みを零して酔芙蓉
伸びやかに垣超す萩のうねりかな
勿頸の友の死悼む秋の風
流れゆく燈籠の灯の波に消ゆ

加藤 静子

(波・はこべ)

虫の夜はことにさみしと病む友の
お互ひの老いにはふれずりんごむく
涙もろき友と過せし聖夜かな
咳しても独りとなりし友案ず
生きてると友のくせ字の賀状かな

加藤 英子

(一葦)

透き間なき林相となる芽吹かな
目薬師へやまもの径つづきけり
古代蓮十重に二十重に足袋の町
塩味のうすさ補ふ実山椒
佐渡よりの新米を炊く誕生日

金井京子

(天為湘南)

留守宅に赫き実下がる藪柑子
小豆粥ひと息ついて椀する
いにしへの城址眺む桜かな
傘開き梅雨前線通過中
かなかなや岩の祠で銭洗ふ

金栗トモ子

開けそめし梅一輪のプラトニック
天地の阿吽の呼吸一葉落つ
桜紅葉A・Iの世を見守りぬ
ロボットを話し相手に新酒酌む
喜寿という青春のあり冬花火

神谷章夫

(xら)

春光を微塵に碎き海の綺羅
見つめあふ手話の親子のあたたかし
麦熟るる頃や一揆も戦争も
四足門潜り湖国の青時雨
竹皮を脱ぎ青空の深きこと

亀倉美知子

(波)

福は内静かに古りしニュータウン
梅一輪主婦たる矜持秘めにけり
嫁ぐ日のもう遠からじ春着の子
雛の宵会へば佳き嫁よき姑
セザンヌの林檎をひとつ播りませう

川口 和子

(天為湘南)

一輪の百合のかをりに目覚めけり
コンジニの青かうかうと夜の秋
秋水や社の駒の鞍飾り
天井まで積む新藁のかをりかな
身ほとりに菊の香満つる地蔵かな

川崎 れいな

聖夜祭僧と語らふカフェテラス
円覚寺心をまるく日向ぼこ
冬ぬくし心ほどける鳩落雁
夏帽子森の薫りを持ち帰る
少年の練習試合日傘さす

河村 美恵子

(鷹)

ホスピスのどの窓辺にも小鳥来る
冬日さす窓の小さきニュータウン
ふらここを大きく漕ぎて意地を張る
芽柳や出待ちの端に加はりて
転勤の噂小耳に風信子

草柳 節子

(天為湘南)

ゆりの木の日の透きとほる若葉かな
紫陽花の蕾湧き出でうすみどり
蟬時雨背を押されゆく散歩道
小春日や夢語り合ふ文化祭
隣町旅する心地木の葉雨

久保田 恵子

(鷹)

紅しほり芙蓉真昼の池に落つ
ビル写す川面に葦の若葉かな
客室の窓に海峡卯波寄す
穂絮とぶ残照の川さざめける
聖夜なり地下一階の予約席

黒川 堇

(天為湘南)

厄除の輪を八の字に春を呼ぶ
街路樹の熱きコーラス油蟬
新米を昭和の枡で量りけり
落葉踏むかさこそかさと語り合ひ
窯出しや冬山肌の炎跡

慶野 千賀子

(天為湘南)

瞬間の送信既読流れ星
湧き出づる歓喜の調べ春の詩
紅葉が和の旋律を彩りて
葉桜に過ぎ行く時を重ね見む
新時代緑の風も祝賀して

小泉 力

足裏の寒さ忘れて龍見上ぐ
冬空や釈迦の声聞く白鹿洞
み仏に心洗はれ冬紅葉
初雪や母と仰ぎて額濡らす
ひきがへる鳴いては闇を深くする

小 高 秀 則

(さら)

春光や老爺の開く資本論
青黴のチーズつまみの桜桃忌
盆の月遠回りして跨線橋
鬼となり守る空缶朴落葉
年の瀬や柱の傷を撫でて拭き

小 林 和 子

(一葦)

蝌蚪の紐泥にまみれし蓮田かな
蛇穴を出て山の風聞いてをり
闇似合ふ大水青の孤独貌
朝露を踏みて近道山の道
老木やゆるゆる肥ゆる猿茸

小 堀 公 美 子

(鵜沼かばちや句会)

遙かなる河口や芦屋川涸るる
マリア像刻む鑿の音聖五月
外つ国の葉巻の薫り伯理祭
婆も児も跳ねて念仏踊の和
大晦日手桶かこんと了ひ風呂

小 松 原 キ イ 子

(一葦)

園児らの声の踏みたる霜柱
茹でこぼす青菜の匂ふ日永かな
春愁や輪ゴムで閉ぢる菓子袋
ゑのころにのの字のの字の風の来て
どうしても届かぬところ野紺菊

小宮山 はるき

(みずぎ)

桜葉降る七十路のベンチかな
流鏑馬の一の矢無音春の海
日陰なき伊豆南端の末枯れ椰子
踊子草平和なる世を踊継ぐ
親父似の羅漢もおはす紅葉寺

小山 美穂

(みちくさ)

処暑来たり蟬のなく声遠ざかり
赤茜水面をすいと飛んでおり
子らの声響く晩夏の帰り道
夜の秋ネズを抱きしめ熟睡す
墓参り今年も文で終えしかな

紺谷 健一朗

(くら)

小児病棟窓いっぱい吊し雛
生るる匂ひ朽ちゆく匂ひ五月闇
木の実降る風のトレモロ石畳
愛想よき禰宜来て峡の七五三
冬ざるる作務衣に残る火の匂ひ

佐野 典比古

(くら・詩あきんど)

青梅雨の窓に兜太の鯨がゐる
火祭りの屋台が囃す匂ひかな
爽やかやベンチ残らず海を向き
十六夜や藻屑しづかにゆらめきて
余熱持つ一日けだるき花カンナ

篠田 清秋

(かわせみ)

夏近し家に犬来る名は「あんず」

初夏や犬は地域をパトロール

サンタさん犬用ケーキプレゼント

さつき咲く老犬遠吠え「ありがとう」と

七夕や天使の「あんず」空を飛ぶ

篠原 広子

(やうら)

二杯目のワイン満たされ春の月

葱坊主ゆつくり暮るる空があり

衣更へて雨音軽くなりにつけり

鶏頭のただただ紅く獺祭忌

秋のソナタ一音長く始まりぬ

島田 昌子

(一輩)

冬の雷手足大きな孫生まる

春立つや背に負ふ吾子の鼓動きく

じやんけんのあいこあいこや冬木の芽

梅雨晴や園児のつつく団子虫

ばあちゃん僕に続けと登山口

庄司 純子

(天為湘南)

涼風をほほに感じてひとやすみ

友情を想ふ秋桜たはむれて

白龍の大空かくる運動会

凌霄の棕櫚にたよりて空めざす

曇天のすきまから見ゆる柿たわわ

鈴木絹子

(冬すみれ)

紫雲英田や遊びし子らの靴二足
封切らぬ手紙一通春の雷
水引の花夕風のほどきゆく
明日よりは火祭りの町富士の峰
善き人の笑顔のままに盆の月

鈴木千枝子

(天為湘南)

風はるか月の水脈へと手漕舟
戻り来る流灯ひとつ妣の声
甘酒を吸ふほどへこむ紙バック
忘るるは生くる術なり釣忍
虫送り里へ訛の赤電話

鈴木千砂

(さくら)

春寒しマトリョーシカの中の闇
朗らかの色の見本や花躑躅
ジャングルのルソー手招く目借時
白木蓮や一夜限りの夜会服
せせらぎは星の匂ひや螢の夜

栖原由美子

(鷹)

からからと風に走るや柿落葉
屋敷神粗末にもせず今年酒
清方の下絵幽幽秋深し
地祭の斎竹揺るる菊日和
ぬばたまの夜雨冷たし竹の径

角 和 富

山陰の鎌倉古道蟬が鳴く
法師蟬御霊神社で鳴きやまぬ
曼殊沙華父の最期を思いだす
台風が東勝寺跡崖くずす
昨夏にて音楽で古希祝いけり

関 美 晴

(波)
シーサーの相やわらかし花の門
剪定のかすかに息のうすみどり
崩れゆくゆたかな黙や白牡丹
マトリョシカ八重の憂いや五月尽
点描の同じ空なし椋鳥の群

草 心

FMのジャズ聴く朝や杏ジャム
ゆうゆうと風和らげる花ミモザ
あらハートちっちゃな一枚レモンの木
作り手の心味わう今年米
秋夕焼つつかけ草履の一目散

相 州 散 人

季節遠きすだこはあかく年新た
味寝せるゆめまぼろしの春の夜
曲水やてんじんさまの盃とどく
霾やプラントンは海原に
燕ひくくひるがへりゆき雨上る

高久弘行

(天為湘南)

そら豆を剥くや戦禍の記事の上
地球儀をまはし戦地を悼む夏
この空に飛ぶや蜻蛉とミサイルと
硝煙の匂ひをつけて烏わたる
侵攻の露国の破壊見る夜寒

高瀬俊次

(さくら)

掛け声の駆け抜けてゆく冬田道
春暁の街をゆつくりパイプの火
ふと爺も「かはいい」のこゑチューリップ
撃たれても嬉し子の撃つ水鉄砲
清流の音と添ひ寝のソロキャンプ

高野尚志

囀りに口笛高く応へけり
雪溪の朝日を浴びて水を汲む
夕暮れは殊に人恋ふ酔芙蓉
いつまでも男の黙や麦を踏む
日当たりて一志貫く朴冬木

たなか 梓

(天為湘南)

春盛んマチスの部屋の午餐かな
夕されば白透くまでも夏椿
鉄さびの道具箱より梅雨に入る
キリンの子睫毛にふはり秋の陽を
雪煙の森は記憶を閉ぢしまま

田 中 千佐子

(湘南若葉)

春潮や彼方の平和祈りをり
伝へ継ぐ被爆二世の銀杏の芽
慎ましきいつもの朝餉終戦日
復興を願ふ向日葵どこまでも
菩提樹の落花に打たれ座禪石

田 中 洋 子

月の浜辺月のかけらの貝ひろふ
楽隊の行進まがる小鳥来る
武士の駆け抜けし道銀杏散る
落葉踏む古墳時代の土を踏む
地に枝に山茶花の白暮れ残り

塚 越 やす子

サツパ舟でめぐる佐原のあやめ園
さはやかや垣の薔薇より歌ながる
振花の紅のラセンや虫登る
寝坊助の孫に鳴らせよ釣鐘草
夏蝶の風に吹かれてながされて

手 塚 智 之

ちらほらとまでは良きなり初の雪
百日紅和服が集う極楽寺
下草の上で笑うや落椿
妻の髪少し短め五月来ぬ
到来の熟柿掬うや銀の匙
(かわせみ)

常盤 貴美子

(冬すみれ)

毬のごと弾むソプラノ春隣
朝市の荷より零れる春の土
真青なる海虹色のかき氷
色尽くし光る一樹や夕紅葉
風の磨きあげたる夜空かな

朽尾 まほ

山葵田の幾何学模様白馬村
放課後のダンスの好きな汗の子ら
秋冷や宮殿に鳴るバグパイプ
背丈より高き銀波芒原
極楽寺古民家カフェ冬ぬくし

永井 かほる

(波)

麦の穂の高さに村の昏れにけり
餌を欲りし鯉は薄暑の風をのむ
今生の杖を休まず睡蓮花
よみがへる銀杏大樹に秋高し
秋の雨どしやぶりにして小栗堂

中田 ほたる

名月へ脱走くじやくは羽ひろげ
盲の人頬に這わせる蚕かな
夏嵐さらうりコーダーの合奏
大ひでり絶滅竜の爪浮かぶ
生きよ生きよと抱き止める蟬しぐれ

永塚 享司

ママチャリの過ぎてつつじの花揺るる

青芝にゴロン空には雲ボカリ

水撒きのホースの先の小さき虹

秋うららクロスワードを兎と二人

脱穀機踏む父に稲渡す母

中 根 美 保

(一葦)

路辺に売る名残の瓜や一遍忌

一つ火や念仏地より湧くごとく

初笑達磨落としが飛びすぎて

伴奏はボルカに変はり薔薇芽ぐむ

小さき花に小さき虫来る涼しさよ

中 野 しおん

(湘南若葉)

上人様の目差し優し花は実に

御神木養生されて青葉満つ

菩提樹の花と香の降る古刹かな

放生池のゆつたり歩くあめんぼう

本堂の「疫病」祓ふ文字涼し

鳴 坂 理智子

(天為湘南)

外国船港に降るる江戸花火

駅中を急ぐ少女の更衣

朽ちるなら瑠璃の地球に流れ星

嶺嶺の襟を正して初日まつ

地球踏む吾子の一步や五月晴

西野洋司

橋本信一

湘南の雪は舞ふかな踊るかな

ほつれ髪花魁草に夕迫る

なぜ刈らぬおんぶ飛蝗が棲むからさ

かなかなが鳴くから母が呼んでるから

ひとごゑかさくら落葉のささやきか

野原青

蓮池虚高

父笑まふ籠いつばいのさざえ手に

泥海を走るが如く夏の潮

原爆忌孤児の記録の復刊す

祖父の膝祖母の腕や盆の月

渡来人帰化を決めけり秋の風

来るべき年ぞと思ひ日記買う

着ぶくれの後姿や冬の夕

透明な色を含みぬ春の雨

はなぐもりまだとゝのわね初音かな

芹つみぬ水の流れと母の笑み

(はまへ)

野分^{ノワキ}吹く道の彼方^{かなた}に吾^{われ}の影

ああ真紅^{しんく}涙滴^{しただ}る百日紅^{さるすべり}

待ち合^あいで告げる数字に息を止め

絵画観^みる無人の室に虫の声

刺^さす胸^{むね}に浮かぶ友垣悲渦^{ひか}の報

初鹿光子

(さら)

誰とでも話したくなる新茶かな
母の日や百歳の笑み雛の中
遠雷や子に読み聞かすアンデルセン
サングラスヘップバーンに憧れて
虎が雨坐り直して計報読む

原田稔

コロナ禍や愛でる人なく紫蘇の花
孫の手の忙しき動き雪だるま
遊び場や風の華やぐ冬薔薇
吉田邸古老仰向く冬の空
落葉かなお礼参りの奥の院

原山テイ子

葉桜の下へ杖の身体めをり
出会ひあり別れありけり花筏
雀の子仲間はづれはをらぬかな
いわし雲しみじみ人に会ひたかり
小鳥来るわたしの時間足りなくて

平岡法子

仰ぎ見る老木たわわの青梅や
公園でよちよち歩く子今朝の夏
沈丁花香りに誘われ見つけたり
猛暑日や気合の声と球音と
同病を励まし合いて梨を食む

(冬すみれ)

廣 崎 龍 哉

添書に人柄しのぶ賀状かな

青き踏む歩き歩いて一万歩

ひまはりを供花に高倉健の墓碑

千年の都の闇や大文字

一陣の風一陣の落葉かな

福 田 善 吉

(冬すみれ)

幾たびも遺句読み返す春の宵

ふらここや思い出だけが揺れており

手に団扇老いし夫婦は背を向けて

緑陰や心やすらぐ人とおり

人気なき鶴沼の浜かげろえり

藤 田 松 邑

秋清^{きよ}か

祖霊座す古城の園に舞う紅葉

父齡倍は越えるぞ神無月

此の秋も笑顔で迎える六地藏

古寺集う戦国大名の談話聞く

盆踊り再開案内や秋明か

藤 田 真 知 子

(天為湘南)

水仙花吾をつらぬく能一管

一村の芽吹きうながす風一陣

囀りをまとふ深山の老樹かな

晩学の知足の旅や春の雲

かなかなの言の葉満つる山暮し

古屋 さちこ

(天為湘南)

母に手を貸して外風呂竹の秋

囀やひかり続ける父の鎌

千年の青葉の闇の神楽殿

廃屋の主となりたる女郎花

生業と受けとめ蕎麦打つ大晦日

堀口 みゆき

(鷹)

贖罪やアネモネの芯濃むらさき

待春の庭ブラウスの不言色^{いふいし}

黒南風や音迫りくるオスプレイ

昼顔や曳船に日の惜しみなく

新涼や帽子を置けば草の音

水口 ヒデ子

(天為湘南)

散りぎはは風の桜となりにけり

日の光沈めて静か春の海

風薫る眼下に能登の千枚田

最果てへひろがる原野晩夏光

喬木は一本がよし雪降れり

宮川 敏江

(波)

谷戸奥に際立つ声や時鳥

席入りのひと日賜る夏椿

秒読みに怯まぬ一手鉦叩

時雨忌やひとり茶飯を噛みしむる

吹き上ぐるきらきら雪の朝かな

宮 永 武 彦

(はまべ・サンシャイン)

江ノ島や水平線の先は春
忘れな草そよ風を貼る切手かな
少彦名命の小舟初夏の風
グラジオラス火星の夜空見にゆこう
命得て線香花火の煌々と

武 藤 セ イ

(天為湘南)

草の海金魚草も泳ぎけり
風やみて代田にうつる白き月
朝の日やダイヤとなれる草の露
天高し四番打者がマウンドへ
よく似合ふ母の振袖孫二十歳

武 藤 元 子

秋刀魚すき孫の欲しいに婆よいしょ
熟柿頬おちると呼んでいる
虫の声ひとりじゃないと柵を取る
弾き語り別れの時の赤とんぼ
よそゆき着綿飴いか金魚のぞきみし

村 上 藤 予

(はまべ)

白南風や同級生の握る寿司
疾き金魚逃げたつもりが石畳
紅を引き涼しき楽屋後にする
松見上げ目に飛び込んだ秋の雨
雨流る寺の水路に退る蟹

村上 容子

駅へ急ぐ吾の足止めし金木屋

物思ひに耽る家路の虫の声

テレビ消すやひとりの居間に虫の声

投票所の学校裏にかき氷

ごくごくと仕事上がりや真夏の夜

森 裕子

(やい)

主なき家にひとときは虫の声

灯火親し「こゝろ」のKに我重ね

灯火親し老犬眠る時間増え

老犬と歩を共にして草紅葉

菊日和背広の父も今日までか

森田 順子

江の島のたちまち消ゆる春の雪

人と人は触れ合ふてこそ雖まつり

文字摺もじずりの同じねぢれで今年また

扁額に年輪しかと建国日

平家池紅蓮風に抗はず

森 本 明 美

(はこ)

新茶汲むうすくれないの萩茶碗

居座りて家を守りし墓がまがえる

あの頃を話す友亡き梅雨に入る

髪洗う昔の人を思いつつ

「もういいよ」萩咲く下に赤い靴

柳生恵子

(天為湘南)

春の土戦下に生まる命あり
笊の上鱧つの字して潔し
菖蒲田に御歌の祈り満ちる朝
芝海老の絡む髭解く春の宵
満月の海に落ちては金の波

山下遊児

奔放なニンフとなりて散る桜
太陽を蹴つて泣く児や聖五月
服装はジャニーズ系の案山子かな
さつきから落葉に尾行されている
寒稽古空一枚を背負投げ

山田潤子

(天為湘南)

海坂へ煌めく水脈や漁始
古を語る眼差し内裏雛
若葉風まとふ音色や森ピアノ
実朝の海に白波大南風
月日経し夫婦茶碗や秋灯

山田貴世

懐かしきものに追羽根・独楽廻し
湘南の空袈裟斬りに初燕
抱一の亀鳴く日なり夕映ゆる
誰も来ぬ島の抜け道猫の道
新樹の香吸うてきざはし奥宮へ

山田敏雄

(天為湘南)

大寒や黙して過ぐる人の波
露の臺苦みの中の恵かな
草の露天空まるく閉ぢ込めり
土用波地球の鼓動轟かせ
鉄橋に汽笛響ける夜寒かな

山本協子

(やう)

灯火親し母の寢息の聞こゆるまで
母ひとり写れる写真冬日向
鍵かけてふたび空き家春の暮
雨照らすライトアップや額の花
谷戸の里イエスのやうな案山子あり

吉田和子

玻璃越しに美しき煉切り奈良の春
箸逃ぐるさぬきうどんや送り梅雨
青梅雨やキルトの仲間少女めく
禅堂の固き蔀や蟬しぐれ
星涼し黒部の谷の流れかな

渡部喬

(やう)

頼朝の潜みし岩屋齒朶明り
新涼や妻の机にある聖書
海眺め無月の故郷離れけり
粧へば粧ふほどに毒きのこ
どんぐりも供へてありし地藏尊

渡 部 有紀子

(天為湘南)

四月馬鹿レンズの中の街逆々
落書きのラッカー真つ赤春一番
チューリップくづれ時間の垂れゐたり
噴水の天辺砕けまた砕け
蓮ひらくモノクロームの世界より

内 藤 繁

(天為湘南)

白南風や洋風建築し字型
The white wind coming from the south,
the residence is builed in the shape of L.
Le vent blanc du sud,
Le bâtiment au style européen est construit
à la forme de letter L.

藤は美に百年迎ふ木造邸

A wisteria bearing fruits,
the wooden house is builed neary a century.
La glycine se mettant en fruit,
la maison de bois construite il y a à peu près cent ans..

子は育ちプールに遊ぶ日のひかり

The children having grown,
the sunlight is enjoying itself in the swimming pool.
Les enfants s'levant,
les rayons du soleil s'amusent dans la piscine.

暖炉の火囲み弦楽四重奏

Arounding the fireplace,
the guest is listening to a string quartet.
Autour d'une cheminée,
on entend le quatuor à cordes.

玻璃と板モザイクに嵌め初日待

Through the window in mosaic with glasses and boards,
we wait the sunrise on New Year's Day.
Par la fenêtre en mosaïques des carreaux et des planches,
on attend le lever de soleil du jour de l'an.

第四十七回一遍上人忌俳句大会

令和四年九月十八日、時宗総本山・藤沢山清浄光寺（遊行寺）大書院にて開催。

参加者七十一名。事前応募句による参加は一一七名。

講演 高柳克弘氏（『鷹』編集長）

―芭蕉に学ぶ俳句の作り方―

応募句の部 入賞作品

○遊行寺賞 加藤 いろは

かへらざる波音ばかり終戦日

○青木賞 佐野 良彦

遊行忌や生きよ捨てよと鉦叩

○北澤賞 鈴木 三枝子

底紅の底を離れぬ蟻ひとつ

○市長賞 高野 尚志

遊行忌の風に乗りゐて草の絮

○協会長賞 瀬戸 松子

母の忌や底紅に雨しづかなり

○協会賞（以下同） 山田 貴世

一遍忌土の匂いの零餘子飯

常盤 貴美子

新涼の風大屋根を滑りくる

高橋 きよ子

破蓮を映して池の黙深し

鹿野島 孝二

遊行忌や風の法衣を着て踊る

畑 昌子

開き見る忘扇に無の一字

山下 遊児

秋日傘たたため風のこぼれけり

長野 保代

うしろより萩の風くる一遍忌

秋蝶や風湧きやまぬ真葛原
中根 美保

川村 研治

遊行忌やきのふとちがふ海の色

寺田 篤弘

身ほとりに秋風たてば一遍忌

吉川 美知子

虹色に暈あはあはと盆の月

石鎚 優

あいさつのごと孟蘭盆の通り雨

藤木 松歩

松明の闇を薙ぎつつ虫送り

神谷 章夫

遊行忌や草のほてりをそのままに

大平 雅芳

鳥渡る無限の空よ遊行の忌

関 美晴

野の草に風の生まるる一遍忌

秋澄むや新聞受けの軽き音
島田 昌子

尾崎 竹詩

こんなに晴れて曼珠沙華曼珠沙華

当日句の部 入賞作品

○遊行寺賞
関 波対子

ゆつくりと鯉離れゆく秋の雨

○青木賞
大平 雅芳

一山を大きく濡らし秋の雨

○北澤賞
霧野 萬地郎

犬猫の卒塔婆は仮名や小鳥来る

○市長賞
高柳 克弘

遊行忌の水の底までとほる雨

○協会長賞
中村 みき子

参道の石に歳月秋の草

○協会賞（以下同）

栖原 由美子

秋の雨白き鼻緒の僧の下駄

中根 美保

秋雨の音の遅れて大書院

鹿野島 孝二

秋の蚊を打ち阿弥陀仏おどろかす

山田 貴世

黒門の黒の際立つ秋の雨

畑 昌子

雨ざんざ傘の波ゆく一遍忌

岡本 泉

大樹なる昏さ安けし秋の雨

橋爪 きひえ

卓上に辞書や眼鏡や秋の雨

久保田 恵子

秋の雨のぼりに銘菓一つ火と

河村 美恵子

式部の実本気の色となりにけり

永井 かほる

秋の雨どしやぶりにして小栗堂

植田 裕子

雨しきり放生池に紅芙蓉

吉川 美知子

軒借るる地藏堂に香秋の雨

高久 弘行

一徹の父のげんこつ柘榴の実

野田 日文

秋雨や指にひやりと喪の葉書

篠原 広子

秋の雨やみては雲の動き出す

山西 雅子

秋雷の轟長し大書院

神谷 章夫

本降りの秋雨鯉の紅しるき

山下 遊児

秋の雨あがりて黙を深めけり

第一二七回市民俳句秋の大会

令和四年十月九日、藤沢市民会館第一展示
集会ホールにて開催。

応募者九十二名、当日の参加は八十五名。

講演 秋尾敏氏（「軸」主宰）

— 近代俳句史を見直す —

入賞作品

○特別賞 山下遊児

炊き上がる湯気に力や今年米

○特別賞 篠原広子

鶏頭のただただ紅く頼祭忌

○市長賞 川路ゆさ

蛸の途絶えて何もかも遠し

○市議会議長賞 島田昌子

かなかなや墓と思しき石二つ

○教育委員会賞 矢口美都子

水澄むや京に逢ひたき仏あり

○俳句協会会長賞 今井美恵子

新松子地図には載らぬけものみち

○協会賞（以下同） 堀口みゆき

芋の葉の露一粒を描き足せり

稲垣正晴

水澄みて水無きやうに魚泳ぐ

前田恵美

木犀の香に持ち直す手提かな

渡部喬

星流れ天に空きたる穴ひとつ

小林和子

老木やゆるゆる肥ゆる猿草

福田善吉

コスモスや更地となりし我が母校

山田貴世

俳人で校長先生小鳥来る

芋名月吾に水巴の洒脱なく
神谷章夫

宮澤進

牛小屋に白衣の獣医カンナ燃ゆ

前田弘子

障子貼るやはき日差の内に居て

畑昌子

身に入むや母負ふための負ひ紐

高瀬俊次

秋風鈴ごとんと雨戸敲きけり

馬来まち子

奥宮へ導く島の絵灯籠

大久保啓子

雨止みてたちまち蟬の山となり

常盤貴美子

野仏に群れても寂し曼殊沙華

杉村良月

両眼の術後の夜半やつづれさせ

金糸降る唐松林牧水忌

丹羽寒國

産土の吾と行き合ふ秋祭

富山ゆたか

秋簾茶屋の女将の京ことば

岩谷明子

街川の淀みへ葛のなだけけり

中根美保

豪快に水飲む遺影秋の天

原山テイ子

よどみなく言い訳する子賜日和

迫和枝

舐るがに砂文字消されゆく晩夏

坂本きみよ

夕月夜そつと汲み取る絹豆腐

吉岡うさお

トロツコのトロトロトロと紅葉山

酒向昭

参道に馴染の菓子舗七五三

上
春
那
美

市民俳句春の大会は、新型コロナウイルス
ウィルス感染症拡大防止のため、
中止となりました。

短

歌